もも・ネクタリン情報　No.3

令和7年4月14日発行

JAグリーン長野営農部販売部・経済部

長野県No.１のもも・ネクタリン産地を守ろう！

◆生育状況について

１．ＪＡ管内　川中島白桃

	発芽	開花	満開	落花
平年	3／25	4／13	4／20	4／28
令和7年	3／26			
令和6年	3／31	4／12	4／18	4／25
令和5年	3／14	4／ 2	4／ 9	4／15

◆当面する重点作業について

1. 天候が不安定な場合は、受粉作業を徹底し、結実確保を図る。
2. この時期は、平年並みの降水量でも不足する時期となるため、４～５月は、干天が続くようであれば、１５日おきに３０㎜程度又は１０日おきに２０㎜程度のかん水を行なう。
3. 凍霜害に注意する時期が続きます。報道・情報・指示により万全な対策を実施する。
4. コンフューザーMM並びにスカシバコンを適期に設置する（設置期日は果樹総合情報参照）
5. 灰色かび病対策。果柄部にがく片や幼果が入り込むと、灰色かび病の元となる。
   結実がよく、摘果が遅れると特に目立つため、除去を徹底する。
6. 葉面散布肥料を有効に活用する。

【もも薬剤防除】

◆第３回薬剤散布について

１.散布時期：４月１９日（土）～２３日（水）満開後頃　　散布日　　月　　日

２.調 合 量：水１００ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンＥ	６６㎖	―	―
ロムダンフロアブル	３３㎖	ハマキムシ類	７日
ウ　ラ　ラ　Ｄ　Ｆ	25g	アブラムシ類	14 日
アグリマイシン―１００	66g	せん孔細菌病	60 日

【ネクタリン薬剤防除】　※もも・ネクタリン混植園

◆第３回薬剤散布について

１.散布時期：４月１９日（土）～２３日（水）　　散布日　　月　　日

２.調 合 量：水１００ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンＥ	６６㎖	―	―
ロムダンフロアブル	３３㎖	ハマキムシ類	７日
ウ　ラ　ラ　Ｄ　Ｆ	25g	アブラムシ類	７日
マ イ コ シ ー ル ド	66g	せん孔細菌病	28 日

【第３回薬剤散布　もも・ネクタリン薬剤防除共通事項】

1. 散 布 量：10a当り⇒400ℓ以上
2. 散布上の留意事項
   ①アグリマイシン水和剤は、ネクタリンには登録が無いため使用しない。また飛散しないように注意する。
   ②訪花昆虫（ミツバチ・マメコバチ）保護のため、記載以外の殺虫剤は、絶対に使用しない。

③アブラムシ類の多発が心配される園は、ウララDFを 2,000 倍(水 100ℓ 当りに 50g)で使用する。
④うどんこ病(毛じ障害)、灰星病(花腐れ)、灰かび病の発生が心配される園は、アンビルフロアブル 1,000 倍(水 100ℓ当り 100mℓ)を加用散布する。
⑤ロムダンフロアブルに代えて、カスケード乳剤 4,000 倍(水 100ℓ当り 25 mℓ)を使用してもよい。
⑥アビオンEに代えて、K. Kステッカー3,000 倍(水 100ℓ 当り 33mℓ)を使用してもよい。
この場合、必ずK.Kステッカーは、最後に混用する。

【もも薬剤防除】

◆第４回薬剤散布について

1.散布時期:4月29日(火)～5月4日(日)　散布日　　月　　日
2.調 合 量:水100ℓ 当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンE	66mℓ	―	―
㊞カナメフロアブル	25mℓ	灰星病・うどんこ病・黒星病	前日
アプロードフロアブル	100mℓ	カイガラムシ類	14 日
アグレプト水 和 剤	100g	せん孔細菌病	60 日

3. 散布上の留意事項
①毛じ障害(りんごうどんこ病)の最重要防除時期となる。なお、結実良く果実が密着していると果面に薬液がしっかりと付着しないため注意する。

【ネクタリン薬剤防除】 ※もも・ネクタリン混植園

◆第４回薬剤散布について

1.散布時期:4月29日(火)～5月4日(日)　散布日　　月　　日
2.調 合 量:水100ℓ 当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンE	66mℓ	―	―
㊞カナメフロアブル	25mℓ	黒星病	前日
アプロードフロアブル	100mℓ	カイガラムシ類	7 日
マ イ コ シ ー ル ド	66g	せん孔細菌病	28 日

3. 散布上の留意事項
①マイコシールドに代えて、アグレプト水和剤 1,000 倍(水 100ℓ当りに 100g・収穫 60 日前)を使用してもよい。

【第４回薬剤散布　もも・ネクタリン薬剤防除共通事項】

1. 散 布 量:10a当り⇒450ℓ 以上
2. 散布上の留意事項
①極早生種等(たまき・なつき・アームキング等)がある場合は、アグレプト水和剤を使用すると、収穫 60 日前までのため、5 月 1 日に散布すると、6 月 30 日まで収穫できない。
生育状況を考え、必要に応じて散布時期を少し早めに変更するか、マイコシールド 1,500 倍(水 100ℓ当りに 66g・年 5 回)に代えて実施する。
②訪花昆虫(ミツバチ・マメコバチ)保護のため、記載以外の殺虫剤使用は絶対にしない。
③カイガラムシ対策として、アプロードフロアブルを散布するため、枝・幹等にムラ無く掛かるよう留意する。
④種有巨峰隣接園は、アグレプト水和剤に代えてマイコシールド 1,500 倍(水 100ℓ当りに 66g)を使用する。
⑤アビオンEに代えて、K. Kステッカー3,000 倍(水 100ℓ 当り 33mℓ)を使用してもよい。
この場合、必ずK.Kステッカーは、最後に混用する。
⑥せん孔細菌病対策として、第4回・5回の中間で、展着剤ササラ 3,000 倍(水 100ℓ当りに 33mℓ) +クプロシールド 1,000 倍(水 100ℓ当りに 100g)+クレフノン 100 倍(水 100ℓ当りに 1,000g)を特別散布してもよい。ただし、白く汚れやすいので周囲への飛散に注意する。

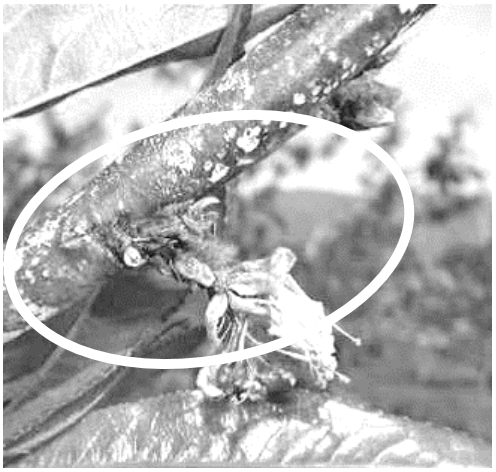
◆灰星病対策について

灰星病は、せん孔細菌病と病斑の症状が似ている。区別がつかなくとも、共に処分する。
症状は満開期頃から見え始めるので、一斉点検を行う。開花期に「花腐れ」症状となっている部位がある。
発見したら早急に病斑部の切除を行い、切除した病斑部は、焼却処分の実施を徹底する。

◆せん孔細菌病春型枝病斑の除去をしよう！！

1）薬剤防除だけでは防ぎきれない難病害であるため、耕種的防除が重要になる。
2）耕種的防除として、春型枝病斑の剪除がもっとも重要になる。できるだけ、早く剪除し感染拡大防止を行う事で、かなり被害を軽減できる。発病は６月までだらだらあるため、２～３回程度に分けて、園内の巡回し病斑切除を行う。

①結果枝をよく見る。花腐れ症状がある、芽の基部周辺が褐色に変わっている、亀裂がある、ヤニが出ている等を確認し、病斑を確認する。
見つけたら、<u>病斑部より、２～３芽程度多く切る。</u>
②葉に病斑がみえたら、上部、又は周辺部に必ず春型枝病斑が存在するため確認する。
③風当りの強い園や園の外周部は多いので特によく確認する。
④弱い品種「黄金桃」、「白根白桃」、「川中島白桃」、「あかつき」等は注意。



◆ももうどんこ病並びにりんごうどんこ病（毛じ障害）について

毛じ障害は、「りんごのうどんこ病」です。毛じ障害の発生は、「あかつき・なつっこ」では、特異的に発生し、「なつき・あぶくま・西王母等」も多い。なお「川中島白桃」では、ほとんど発生が見られない。
りんご園（特に紅玉・つがる・シナノスイート等）の近隣では、特に多発が懸念されるため、注意が必要。
重点防除時期に定期防除で対策薬剤を使用しているので、しっかりと実施する。

★「りんごうどんこ病（毛じ障害）」の対策
①感染時期は、落花期～落花15日後頃までで、それ以降は感染が見られない。
②果皮が既に大きく変色したものや、サビ状になっているものは摘果する。

★「ももうどんこ病」の対策
①重点防除時期は、定期防除（5回目）対策薬剤を使用しているので、しっかりと実施する。

★共通
①りんごうどんこ病（毛じ障害）は、後期症状になると、ももうどんこ病との見分けは困難であるため、発生時期・初期症状を把握し、判断する。
②薬剤が果実に掛りやすいよう、結実が良い場合等、果実同士が密着しないよう、摘果しておく。
③被害果が多い場合は、中でも程度の軽い果実や果柄部側（ホゾ側）のものを優先に残し、空枝にはせず適正着果量を確保する。

	もも　うどんこ病	りんご　うどんこ病（毛じ障害）
発生時期	落花30日頃から	落花15日頃から（満開後20日後～25日頃）
初期症状	白粉をまぶしたような円形の病斑 毛じ内に白粉が観察される 果皮に異常は見られない	淡褐色～褐色の小斑点 毛じは健全 果皮が淡褐色～褐色に変化
後期症状	菌そうは消え、毛じや果皮が褐変 着色期に目立たなくなる 一部でやや凹んだサビ状になる	被害部はサビ状となる 軽微なものは着色に より目立たなくなる